

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 24 日現在

機関番号：28003

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520205

研究課題名(和文) 中間小説誌の研究 昭和期メディア編成史の構築に向けて

研究課題名(英文) Study of Chukansyousetusi

研究代表者

小嶋 洋輔 (Yousuke, Kojima)

名城大学・国際学部・准教授

研究者番号：50571618

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究事業は、中間小説誌という存在を史的に捉え直す作業を主として行った。結果、中間小説誌は、以下のような三段変容を遂げていたことがわかった。それは、出版不況と淘汰が起こり、中間小説誌市場の自立化が顕著に進んだ昭和二四年、倶楽部系雑誌が退場し、中間小説誌がその役割をも含むかたちで大衆化した昭和二九年、そして、社会派推理小説の隆盛と風俗作家のフェイドアウトが起きた昭和三六年、というように三つの年が象徴的に示す変容であった。個々の中間小説誌を検証していくことで、読者層と雑誌メディアが段階を経て相互干渉していき、昭和期のメディア編成そのものが大きく展開していた様が明らかになったといえる。

研究成果の概要(英文)：This research mainly looks at Chukansyousetusi from a historical perspective and reveals that its historical change includes three steps. In 1949, its market established itself after the depression and weeding out in the publishing industry. In 1954, it became popularized by taking the place of Kurabukei zasshi. And in 1961, Syakaihasyousetu became popular and the authors of Fuzokusyouseitu gave way. By investigating each Chukansyousetusi, we reveal that the organization of the media in the Shouwa period made a significant change through the interaction between readers and magazine media.

研究分野：日本文学

キーワード：メディア研究 昭和史 近代文学

1. 研究開始当初の背景

昭和期の文学史において、その存在の大きさにかかわらず、中間小説は実在的な定義が為されていない。純文学も大衆文学も小説の内容や結構に対する一つの傾向の名称とするならば、中間小説も小説の一傾向だと考えられる。そのため同時代的認識においては、「純文学の作家が、調子をおろしてかいた小説」(荒正人)と捉えられていた。しかしこれは「調子をおろして」と、作家側の主観的感想にその本質を求めるだけで、中間小説の実体は判然とししない。だが実体が判然とししないにも関わらず、中間小説という自律的な場の形成が、戦後の純文学や大衆文学の価値を大きく転換させた。そしてその場は中間小説誌という雑誌メディアによって形成されたものであった。

これは、先行の言説にも影響を与えている。中間小説に関する研究は少なくないが、論者各自の主観に委ねられたものといえた。

2. 研究の目的

本研究では、資本によって形成された「文学場」としての中間小説、すなわち中間小説を「現象」として捉えることを目的とする。そのため以下三種の目的を据え、調査作業を行う(作業の詳細に関しては「3. 研究の方法」で詳述する)。

(1) 中間小説誌が如何なる雑誌メディアであったかの解明(資料の保存・公開)

(2) 中間小説誌編集の戦略の解明

(3) 中間小説誌読者の位置づけ

以上の三種からなる作業によって、中間小説誌全体の見取り図の構築を行う。

戦後日本における娯楽の一形態として広く受容され、それを「小説ジャンル」と捉えれば最大のものである中間小説を分析することは、日本の「戦後」を文化的に規定する一つの巨大な底流を明らかにする手がかりとなる。そして「文学」という言語芸術が「戦後」の日本社会においていかなる役割を担ったかという問題についても、本研究は新たな視座を提示し得る。こうした視点で研究を進めることは、他学問領域である歴史学やメディア研究における占領期や高度経済成長期に関する研究成果とも繋がり、学際的な研究といえるものとなる。また文学研究の中でも、作家ごとの研究に蛸壺化しがちな日本戦後文学研究の接続点となる視点を有した研究である。

3. 研究の方法

(1) 中間小説誌が如何なる雑誌メディアであったかの解明(資料の保存・公開)
調査報告が少なく、さらに「読み捨てられる」

消費形態により散逸が進む中間小説誌の全体像を把握するために基礎情報を収集調査する。表紙・目次・挿絵・読者欄・編集後記等の雑誌を構成する諸要素のデータを採取し目録化することで、雑誌の書誌情報を整備し、中間小説各誌の性格を明らかにする。またこうして得たデータはHP、報告書で公開し、研究成果を社会に還元する。

(2) 中間小説誌編集の戦略の解明

基礎情報調査に基づき、目次構成、挿絵の機能及び効果を分析し雑誌編集の戦略を抽出する。また編集後記などの作り手側の言説を分析参照しながら隣接するジャンルである文芸誌及び大衆誌との比較を行う。これにより中間小説誌の特徴が明らかになる。

(3) 中間小説誌読者の位置づけ

中間小説誌の需要形態を明らかにするために読者分析を行う。中間小説誌に登場する作家の随筆・日記等に描かれた、作家側の想定する読者像を分析するとともにテキストに内包された読者の機能を分析する。また発行部数や販売形態といった流通機構に関連する情報を調査することで、中間小説を需要する読者像が明らかになる。さらに「読者の声」等に表れた読者側からの言説を分析することで隆盛を極めた戦後の中間小説誌ブームを支えた読者の正体を探る。

4. 研究成果

本研究事業は、上記目的に従い、中間小説誌という存在を史的に捉え直す作業を主として行った。結果、中間小説誌は、以下のような三段変容を遂げていたことがわかった。それは、出版不況と淘汰が起こり、中間小説誌市場の自立化が顕著に進んだ昭和二四年、倶楽部系雑誌が退場し、中間小説誌がその役割をも含むかたちで大衆化した昭和二九年、そして、社会派推理小説の隆盛と風俗作家のフェイドアウトが起きた昭和三六年、というように三つの年が象徴的に示す変容であった。個々の中間小説誌を検証していくことで、読者層と雑誌メディアが段階を経て相互干渉していき、昭和期のメディア編成そのものが大きく展開していた様子が明らかになったといえる。

以下、年度ごとの作業を詳述する。

(1) 平成24年度

平成二四年度は昭和二〇年代の中間小説誌についての調査を進めた。国立国会図書館・日本近代文学館・神奈川近代文学館などに赴き、目次・奥付・編集後記を複写、解析を進めた。その成果として、戦後の占領期に相次いで創刊され、そして消えていった最初期の中間小説誌の典型といえる「小説と讀物」・「苦楽」・「小説界」の総目次をまとめ、「千葉大学人文社会科学研究所」に発表した。また調査を進める過程で、中間小説誌とそ

の隣接領域の雑誌メディアとの境界線上にある雑誌群の調査を進める必要が生じた。これは当初の研究計画にはなかった作業であるが、戦後メディア史の布置を概観するためには必要な作業である。境界線上にある雑誌群とは、倶楽部系雑誌との境界にある「読物と講談」や、総合誌との境界にある「モダン日本」、「につぼん」などであるが、なかでも「小説朝日」は、中間小説誌として改めて捉え直すべき、雑誌であることが判明した。その総目次の公開を次年度と設定し、平成二四年度は分析を進めていった。

また、詳細は後述するが、近畿・中国地方にある文学館調査を行った。吉備路文学館・姫路文学館・神戸文学館・山田風太郎記念館・司馬遼太郎記念館に赴き、学芸などから教示を受けつつ、展示物、所蔵資料の調査を行った。こうした文学館の調査は、核作家の顕彰法に、中間小説誌というメディアがどのように関わっているか、発表メディアに関して文学館側は如何に意識しているかを探るものでもある。また現地に赴かなければ手に入らない文学館発行の印刷物についても、研究費を用い収集した。さらに、実際に史料管理や展示を手がける学芸員と面識を得ることができたことは大きい。

当研究事業の題を冠するHPを作成、運営を開始した。収集した目次奥付や、研究代表者、研究分担者執筆の関連論文を公開している。

平成二四年度最大の成果としては、本事業の前身であった第13回松本清張研究奨励事業の研究報告書「松本清張と昭和三〇年代『中間小説誌』」(北九州市立松本清張記念館)を発行したことである。そのなかに付した昭和三〇年代中間小説誌の分布図は、本事業の調査をもとに作成された。

(2) 平成 25 年度

平成二五年度は、国立国会図書館・日本近代文学館・神奈川近代文学館などにおける昭和二〇年代、昭和三〇年代の中間小説誌及び隣接領域の雑誌メディアとの境界線上にある雑誌群の史料収集を終了させた。そしてその史料である目次・奥付・編集後記などの分析を、ほぼ毎月開催したワークショップにおいて行った。収集した史料としては、「オール読物」、「小説新潮」、「小説公園」といった昭和二〇年代から中間小説誌を牽引してきた雑誌や、「小説現代」、「小説中央公論」といった昭和三〇年代の雰囲気の色濃く持つ雑誌及び、境界線上にある雑誌群といえる週刊誌の別冊、「小説春秋」、「オール小説」といった雑誌名があげられる。その成果として、調査により中間小説誌として捉え直すべきと判明した「小説朝日」の概要、総目次をまとめ「千葉大学人文社会科学研究所」に発表した。中間小説誌の市場形成に伴い、次第に中間小説的性格を取り入れ、独自の地位を獲得するに至った「別冊文藝春秋」に着目した。

その変遷を追うためにその昭和二〇年代の総目次をまとめ、同じく「千葉大学人文社会科学研究所」に発表した。

また、境界線上にある雑誌群も含め、挿絵、読者の声欄及び各雑誌が設置した文学賞に関する調査を進めた。特に、中間小説誌の「御三家」とも呼ばれ、読者の声欄、文学賞に特徴のある「小説新潮」の調査、分析を進めた。

同時に中間小説誌に多くの作品を掲載した作家の小説を精読する作業を行った。ワークショップで発表者を定め計九回、大佛次郎、今日出海、小山いと子、獅子文六、川崎長太郎、舟橋聖一、水上勉、橘外男について考察した。いずれも日本近代文学研究においてほとんど研究されてこなかった作家であるが、中間小説誌掲載作品とそれ例外の差をみるなど、その研究対象としての可能性を探った。なぜ研究対象足り得なかったかという問題まで含めて、討議を行った。

平成二四年度の近畿・中国地方の文学館調査に引き続き、平成二五年度は東北地方、北陸地方、山梨県の文学館の調査を行った。とくに青森県及び秋田県の文学館への調査は時間をかけて行った。学芸員から様々な教示を受けつつ、展示物、所蔵史料の調査を行い、現地に赴かなければ入手困難な史料を収集した。

(3) 平成 26 年度

平成二六年度は、残された昭和四〇年代中間小説誌の史料収集とその後継雑誌群の調査、史料収集を国立国会図書館・日本近代文学館・神奈川近代文学館などを中心に行った。だが、中間小説誌という存在が次第にその特色を失ってゆく昭和四〇年代の考察は今後の継続作業として、中間小説誌が中間小説誌足り得た時代のとりまとめが平成二六年度の主たる作業となった。

そのとりまとめ作業の第一にあげられるのが、本項目「4」冒頭で述べた、中間小説誌という存在を史的に捉え直す作業である。

そして研究代表者及び分担者それぞれの関心に基づく調査、考察も平成二六年度の大きな作業となった。以下、それらを箇条書きで列挙する。

中間小説という不分明なジャンルを定義づけるものとも成り得た文学賞の存在に着目し、資料を収集、考察するもの

中間小説誌を代表する作家である舟橋聖一と、「小説新潮」を中間小説誌の盟主たらしめた『雪婦人絵図』の問題を考察するもの
戦後時代小説というジャンルの変遷のなかでの中間小説の役割を考察するもの

「小説新潮」の人気企画「小説新潮サロン」「読者の声」欄の分析

これらの作業が、予算にて刊行、配付した、小嶋洋輔・西田一豊・高橋孝次・牧野悠『中間小説誌の研究 昭和期メディア編成史の構築に向けて』(後述)に掲載される論文とな

った。

また文学館の調査については、平成二六年度は静岡県井上靖文学館、日本文学資料館（三島市図書館内）の調査を行った。この調査では現地でのワークショップも開催した。また、大阪・京都の文学館への調査を行った。

総目次の作成も引き続き行い、昭和二〇年代の「小説新潮」を対象とし、上下に分けて「千葉大学人文社会科学研究」に発表した。

引用文献

荒正人「中間小説と免罪符」(『文學界』一九五五・三)

ピエール・ブルデュー『芸術の規則』(石井洋二郎訳 藤原書店 一九九五・二及一九九六・一)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 17 件)

高橋孝次、大衆雑誌懇話会賞から小説新潮賞へ 「中間小説」の三段変容説、「中間小説誌の研究」研究報告書、査読無、5 - 16

西田一豊、舟橋聖一『雪婦人絵図』と中間小説誌、「中間小説誌の研究」研究報告書、査読無、17 - 25

牧野悠、「チャンバラ小説」の徴候 戦前期大衆文学論からの要請、「中間小説誌の研究」研究報告書、査読無、26 - 38

小嶋洋輔、中間小説誌における「読者の声」欄の位置 「小説新潮」昭和二八年～昭和三九年、「中間小説誌の研究」研究報告書、査読無、39 - 50

小嶋洋輔、安岡章太郎の書き分け戦略『中間小説誌』との関連を中心に、千葉大学語文論叢、査読有、29 巻、37 - 48
http://mitizane.ll.chiba-u.jp/metadb/up/AA12576416/gobun29_kojima.pdf

小嶋洋輔・西田一豊・高橋孝次・牧野悠、昭和二〇年代の『小説新潮』(下)―中間小説誌総目次、千葉大学人文社会科学研究、30 巻、8 - 56
http://mitizane.ll.chiba-u.jp/metadb/up/AA12170670/18834744_30_8-56.pdf

小嶋洋輔・西田一豊・高橋孝次・牧野悠、昭和二〇年代の『小説新潮』(上)―中間小説誌総目次、千葉大学人文社会科学研究、29 巻、13 - 53
http://mitizane.ll.chiba-u.jp/metadb/up/AA12170670/18834744_29_13_53.pdf

牧野悠、「臚」の越境 五味康祐『柳生連也斎』前・後、千葉大学人文研究、査読有、43 巻、2013、57 - 89

西田一豊、福永武彦『鬼』論 雑誌メディアと福永武彦、福永武彦研究、査読有、9 巻、2 - 17

小嶋洋輔・西田一豊・高橋孝次・牧野悠、『小説朝日』―中間小説誌総目次、千葉大学人文社会科学研究、査読無 27 巻、1 - 21
http://mitizane.ll.chiba-u.jp/metadb/up/AA12170670/2013no.27_1_21.pdf

小嶋洋輔・西田一豊・高橋孝次・牧野悠、昭和二〇年代の『別冊文藝春秋』―中間小説誌総目次 附『文藝春秋別冊』総目次、千葉大学人文社会科学研究、28 巻、1 - 35
http://mitizane.ll.chiba-u.jp/metadb/up/AA12170670/18834744_28_24.pdf

高橋孝次、『中間小説』の真実なもの『地方紙を買う女』と『野盗伝奇』、第一三回松本清張研究奨励事業報告書 松本清張と昭和三〇年代「中間小説誌」(北九州市立松本清張文学館)、査読無、13 巻、2012、4 - 17

牧野悠、清張の“ポスト銭形”戦略『オール読物』のなかの『無宿人別帳』、第一三回松本清張研究奨励事業報告書 松本清張と昭和三〇年代「中間小説誌」(北九州市立松本清張文学館)、査読無、13 巻、2012、18 - 29

小嶋洋輔、松本清張作品と東京の拡大、そして中間小説誌 松本清張『歪んだ複写』論、第一三回松本清張研究奨励事業報告書 松本清張と昭和三〇年代「中間小説誌」(北九州市立松本清張文学館)、査読無、13 巻、2012、29 - 39

西田一豊、『日本の黒い霧』と小説群 松本清張の小説方法をめぐって、第一三回松本清張研究奨励事業報告書 松本清張と昭和三〇年代「中間小説誌」(北九州市立松本清張文学館)、査読無、13 巻、2012、40 - 47

牧野悠、『剣豪小説』の双生児(下) スポーツマン一刀斎と眠狂四郎、大衆文学研究、査読無、145 巻、2012、30 - 38

小嶋洋輔・西田一豊・高橋孝次・牧野悠、『小説と讀物』『苦楽』『小説界』 中間小説誌総目次、千葉大学人文社会科学研究、査読無、26 巻、2012、
http://mitizane.ll.chiba-u.jp/metadb/up/AA12170670/2013no.26_1_62.pdf

〔学会発表〕(計 2 件)

牧野悠、秘術の叙法と視覚情報 剣豪・忍法小説と挿絵、昭和文学会秋季大会「特集挿絵と文学」、2014・11・8、成蹊大学

小嶋洋輔、『中間小説誌』の時代における
遠藤周作、第九回遠藤周作学会 2014・9・
20、白百合女子大学

〔図書〕(計 2 件)

高橋孝次・牧野悠・小嶋洋輔・西田一豊、
北九州市立松本清張文学館、第一三回松本清
張研究奨励事業報告書 松本清張と昭和三
〇年代「中間小説誌」、2013、53

小嶋洋輔、双文社出版、遠藤周作論 「救
い」の位置、2012、300

〔その他〕

ホームページ等

中間小説誌の研究 昭和期メディア編
成史の構築にむけて

<http://chuukansyosetu.web.fc2.com/>

本事業の研究報告書として
小嶋洋輔・西田一豊・高橋孝次・牧野悠『中
間小説誌の研究 昭和期メディア編成史の
構築に向けて』を発行、関係機関に配付。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小嶋 洋輔 (KOJIMA, Yousuke)

名城大学・国際学群・准教授

研究者番号：5 0 5 7 1 6 1 8

(2) 研究分担者

西田 一豊 (NISHIDA, Kazutoyo)

千葉大学・大学院人文社会科学研究科・人
文社会科学研究科特別研究員

研究者番号：0 0 5 7 1 6 2 1

高橋 孝次 (TAKAHASHI, Koji)

千葉大学・大学院人文社会科学研究科・人
文社会科学研究科特別研究員

研究者番号：2 0 5 7 1 6 2 3

牧野 悠 (MAKINO, Yu)

千葉大学・大学院人文社会科学研究科・人
文社会科学研究科特別研究員

研究者番号：5 0 5 7 1 6 2 6